

第24回昭和館運営有識者会議

日時 令和6年2月29日(木) 14:00～

場所 昭和館3階研修室

○波多野座長 それでは、定刻になりましたので、第24回目の「昭和館運営有識者会議」を開会いたします。

本日は、年度末のお忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

本日の出席状況ですが、8名の委員のうち、7名の委員に御出席いただく予定であります。松井委員は欠席となっております。それから、まだ加藤委員が到着されていませんけれども、始めたいと思います。

それから、オブザーバーとして、しょうけい館からも御参加いただいております。よろしく願いいたします。

なお、今年1月1日付で昭和館運営有識者会議委員の改選がございましたので、事務局より御報告をお願いいたします。

○山田補佐 厚生労働省社会・援護局援護企画課の山田と申します。御報告いたします。

今年1月1日付で昭和館運営有識者会議委員の改選がございまして、新たに、江田委員、加藤委員が就任されております。

大変僭越ではございますが、私から、お手元の委員名簿に沿って改めて皆様を御紹介させていただきます。よろしければ、委員の先生方、自己紹介や近況など一言添えていただければ幸いです。

座長、波多野澄雄様。

○波多野座長 波多野です。

長年この昭和館の運営には関わっておりますが、現在は国立公文書館の傘下にありますアジア歴史資料センターのセンター長を務めております。これも10年になるのですけれども、最近、国立公文書館も2028年に移転することになりまして、今、新館建設が進んでおります。この新しい公文書館は、これまでの公文書館とはかなり違って、その規模も中身も刷新される予定です。

それから、ほかの類縁機関といいますか、文書館、資料館の類いは大きく変貌しようとしています。特にデジタル化がどの館でも進んでおりまして、その点で、アジ歴はデジタル化そのものをやっているものですから、紹介する機会が非常に多くなっております。本日は、この昭和館のデジタル化の話も出るようでありましてけれども、その際にまた申し上げたいと思っております。

以上です。

○山田補佐 続きまして、江田肇様。

○江田委員 こんにちは。私、日本遺族会から推薦いただきました、埼玉県遺族連合会の江田でございます。どうぞよろしく願いいたします。

昭和18年生まれで、戦没者の遺児になりまして、昭和館ができるきっかけとなったその立場の者でございます。私は高校生の頃から、遺児の先輩であります方から遺族会に出る

ように言われまして、それからやっていますので、もう60年以上関わっております。途中は、仕事等がありまして余り関わりはできませんでしたが、50代、60代になってから、できる限り遺族会に出るようになりまして、いろいろな役職をいただいて今に至っております。どうぞよろしく願いいたします。

○山田補佐 続きまして、加藤聖文様。

○加藤委員 加藤と申します。よろしく願いします。すみません。今、仙台から帰ってきたばかりで、こんな格好で申し訳ございません。

私、日本近現代史をやっております。今は、こちらの関係でいいますと、中国帰国者支援交流センターのほうで語り部の育成事業のアドバイザーをしております。肩書自体は実は4月に変わってしまうのですけれども、一応今の所属はここになります。どうぞよろしく願いします。

○山田補佐 続きまして、神津カンナ様。

○神津委員 神津でございます。

小さな事務所をやっているのですけれども、30年以上一緒にやってきた弊社の社長が2022年8月17日に亡くなって、そのお通夜の支度をしているときに私が倒れまして、生まれて初めて救急車というものに乗りました。それで、手術をして九死に一生を得たのですけれども、そのために1年近くいろいろなお仕事を棒に振ってしまいました。ようやく今年復帰しようかなと思っておりましたら、昨年の大みそかに母が亡くなりまして、それですったもんだで、世の中ってこんなこともあるのだなとちょっと感じておりました。そんなわけで、ちょっとお聞き取りにくい声だと思っておりますけれども、御容赦願いたいと思います。

でも、そういう時期を経て、ようやく昭和館の意味というものをごく感じられるようになりましてのと、私、しょうけい館にも関わり合っているのですけれども、戦傷病者の方のありようもいろいろな意味で非常によく分かるようになってきましたので、また新たなお手伝いができるのではないかと感じております。よろしく願いいたします。

○山田補佐 続きまして、鈴木淳様。

○鈴木委員 東京大学文学部の鈴木淳と申します。日本近代史が専門で、主に明治・大正時代なのですが、2027年が東京大学の創設150年ということで、今、その150年史を作るといって携わっていて、また改めて昭和というものを見直さざるを得なくなっております。ちょうどその本ができる頃には私も定年を迎える予定で、今、それを楽しみに日々暮らしておるところであります。よろしく願いいたします。

○山田補佐 続きまして、藤田琢治様。

○藤田委員 こんにちは。目黒区立第九中学校の藤田と申します。社会科を担当しております。

昭和館は子供たちに分かりやすい展示がたくさんされているかと思えます。とてもいい施設ですので、何とかまた子供たちにもこのよさを伝えていけたらなと思っております。

よろしく願いいたします。

○山田補佐 続きます、増田弘様。

○増田委員 立正大学法学部名誉教授の増田でございます。近現代の日本政治外交史を専門としております。また、同時に、3館連携でいろいろお世話になっております新宿の平和祈念展示資料館のほうにも関わっております、しょうけい館ともども御一緒にいい方向を目指して進めていきたいと考えている次第でございます。よろしく願いします。

○山田補佐 ありがとうございます。

引き続き、前回開催以降、厚生労働省社会・援護局の人事異動がありましたので、御紹介いたします。

朝川知昭社会・援護局長、泉潤一大臣官房審議官、石塚哲朗社会・援護局援護企画課長。

朝川局長、泉審議官は昨年7月、石塚課長は昨年9月の人事異動により着任しております。なお、本日、朝川社会・援護局長はほかの用務のため欠席とさせていただきます。

○波多野座長 ありがとうございます。

それでは、泉審議官に御挨拶をお願いいたします。

○泉審議官 厚生労働省大臣官房審議官の泉でございます。第24回昭和館運営有識者会議の開催に当たりまして、一言御挨拶申し上げます。

委員の先生方には、日頃から昭和館の運営に当たり御尽力を賜り、厚く御礼を申し上げます。また、本日は、大変御多忙の中、本会議に御出席、御参加いただきまして、誠にありがとうございます。

戦後78年余りが経過し、戦後生まれの方が大多数を占める今日、さきの大戦の記憶を風化させることなく次の世代に継承することの重要性がますます高まってきております。戦没者遺族を初めとする国民が経験した戦中・戦後の生活上の労苦を次世代に伝えていくことを目的とする昭和館の意義も一層重要なものとなっております。

本日は、昭和館の令和5年度の事業報告、そして令和6年度の事業計画案について御意見をいただくことになっております。また、去来年度は、戦後80年という節目の年を迎えることとなります。戦中・戦後の生活上の労苦を伝えていく昭和館においても何かできることはないかと、厚生労働省においても記念事業など検討を進めているところでございます。運営有識者会議の委員の皆様からも貴重な御意見を賜れば幸いです。昭和館の運営がより充実したものとなりますよう、皆様方の幅広い視野から忌憚のない御意見をいただければと存じております。

以上、簡単でございますが、私の御挨拶とさせていただきます。

○波多野座長 ありがとうございます。

では、昭和館の館長がいらっしゃいますので、伍藤館長をお願いいたします。

○伍藤館長 一昨年の10月から館長を仰せつかっております伍藤でございます。何とぞよろしく願いします。

今、泉審議官からもお話がありましたが、来年は戦後80年、昭和でいうと昭和100年という節目の年でありますし、その1年前の今年、来月3月でこの昭和館が25周年、四半世紀を迎えるということで、私ども、この昭和館に携わっている者にとりましては、今年、来年と非常に大きな節目の年だなという認識でおります。ささやかではありますが、25周年の記念行事もいろいろ考えております。後ほど業務報告の中で触れさせていただきたいと思っております。

私も就任してまだ1年半足らずでございますので、深くは分かりませんが、記憶の風化といいますか、時間がたてばたつほど、私どもの昭和館のような事業を国民に伝えていくことがなかなか難しくなるということをいろいろな機会にひしひしと感じております。今まで皆様方の御協力で何とか25年、昭和館を維持運営してまいりましたが、例えばこれから25年先のことを考えますと、ちょうど区切りのいいところで25年後の日本の姿をイメージしてみますと、0歳から30歳までが令和生まれの人たち、30歳から60歳まで、ちょうど区切りのいいところで、社会の中核が平成生まれの人、昭和生まれは60歳以上という3分類の社会に。25年後というのはすぐ来ると思いますが、そういう社会が到来するという事です。

そういう社会が到来するとともに、私がつくづく感じておりますのは、昭和館を運営する人たちは、我々職員自体も、今、何人かは平成生まれの人に昭和館の館員として働いていただいておりますが、25年後になるとほとんど平成生まれの人。そういう人たちがこの昭和館を担っていく。多分、令和生まれの人でも昭和館の職員として働いているようなことになるわけでありまして、外が変わると同時に昭和館の中も変わっていくわけです。そういう人たちにいかに昭和というものに愛着を持っていただいたり、思いを持って仕事をさせていただくかということもなかなか難しいことだなと。内部でそういう昭和というものに対する思いとか熱意があって、やっといういいアイデアが出たり、その熱意が外に伝わっていくということではないかと思っております。国民に昭和館を知っていただいて、それを昭和の戦争の歴史、記憶を伝えていくというのは、外に伝えていく以上、中でどうやってそのエネルギーを再生していくかというのはまた難しいものがあるかなと。抽象的ではありますが、そんなこともつらつら考えながら、何をやったらいいのかということを考えているところでございます。

ちょっと長くなりましたが、雑感でございます。

○波多野座長 ありがとうございます。

それでは、議事に入る前に、資料の確認を事務局からお願いいたします。

○山田補佐 それでは、お手元に配付しております資料の確認をお願いいたします。

配付資料といたしまして、資料1「令和5年度昭和館運営事業の実施状況について」、資料2「令和6年度昭和館運営事業計画案について」、資料3「第22回昭和館作文コンクール審査結果」、資料4「第16回昭和館中学生・高校生ポスターコンクール作品各賞」、資料5「特別企画展展示構成」、資料6「写真展展示構成」、資料7「令和6年度昭和館

運営事業計画表」、また、参考資料といたしまして「昭和館運営有識者会議開催要綱」と「昭和館運営有識者会議委員名簿」、本日の座席図と、チラシとして2部、「昭和を駆け抜けた超特急」が1部、「失われゆく昭和の仕事」を1部配付させていただいております。全てお手元にございますでしょうか。

○波多野座長 それでは、ただいまから議事に入りたいと思います。

お手元の議事次第にございますように、本日は「令和5年度昭和館運営事業の実施状況について」、そして「令和6年度昭和館運営事業計画案について」を御審議いただきます。

では、初めに、5年度の運営事業の実施状況についてお願いいたします。

○岩楯総務部長 昭和館の岩楯より説明させていただきます。恐縮ですが、座って説明させていただきます。

資料につきましては、事前に送付させていただいていると聞いておりますので、本日の質疑時間を考慮しまして、私からポイントを絞って一部割愛して説明させていただきます。

それでは、資料1により令和5年度の実施状況につきまして御説明いたします。

1ページの昭和館の入場者状況でございます。最初に(1)で、4月から1月末の総入場者数でございますが、合計で13万926人でございます。なお、平成11年度以降の入場者数は合計で671万7264名となっております。コロナ禍前には及びませんが、徐々に回復してきているものと考えているところでございます。

(2)各展示室の入場者状況の内訳は記載のとおりでございます。資料に沿いまして順次簡単に説明させていただきます。

2ページをお開きください。昭和館の利用状況としまして、1月31日現在の統計資料をつけております。以下、6ページまで入場者の状況をまとめております。

資料2ページの昭和館利用状況については、今年の同時期と対比しまして1万2692人増えておりまして、率にしまして7.3%の増となっているところであります。また、その表の特別企画展④でございますが、前年比マイナス5944となっております。これにつきましては、例年秋に実施していましたが写真展を事情により見送ったことの影響かと思っております。入場者数につきましては、昨年7月に常設展示室の入場料を値上げさせていただきましたが、特に値上げの影響もなく、有料入場者数も増加しておりまして、また、値上げの不満等の意見もありませんでした。値上げを受け入れていただいたものと思っております。

7ページをお開きください。2、広報活動の実施状況につきまして、それぞれPR活動等を記載しております。資料についてはおのおのの説明は省略させていただきますが、広報活動の細部につきましては8から9ページに具体的に掲載しております。

10ページをお開きください。ホームページ、SNSの状況について記載しております。本年度のホームページへのアクセス件数は、1月31日現在で12万6170件となっております。また、SNSについては、エックス、フェイスブック、ユーチューブを実施しておりますが、それぞれのアクセス件数は資料に記載のとおりでございます。

10ページから11ページにかけてでございますが、3、来館促進対策について。(1)で

常設展示室の入場無料等を記載しております。（２）の第22回昭和館作文コンクール及び（３）の第16回昭和館中学生・高校生ポスターコンクールにつきましては、昨年同様実施したところでございます。作文コンクールは263作品、ポスターコンクールにつきましては180作品の応募がございまして、それぞれ資料３及び資料４に各賞審査結果を整理しておりますので、後ほど御覧いただければと思います。

次に、11ページの（５）紙芝居定期上演会については、資料に記載のとおりでございます。

12ページをめくっていただきまして、４の展示事業でございます。（１）の常設展示室の資料交換は６月と１月に予定どおり行いました。（２）の特別企画展につきましては、３月と７月。３月につきましては「時代をまとう女性たち」、７月は「歴史探偵 半藤一利展」を実施しております。

13ページ中段、③「昭和を駆け抜けた超特急～燕（つばめ）、そして新幹線へ～」につきましては、資料５により後ほど学芸担当より詳細に御説明をいたします。

13ページから14ページにかけまして、（３）巡回特別企画展の開催状況を記載しております。６月に奈良県で企画展を実施しまして、入場者数は3473名でございました。そして、昭和館・しょうけい館・平和祈念展示資料館の３館連携企画展としまして、12月に「くらしにみる昭和の時代 宮城展」ということで開催しまして、これにつきましては入場者数は8668人でございました。

15ページ、（４）写真展の開催でございます。①「子どもたちの戦中・戦後」を令和５年３月から５月に開催しまして、入場者数は１万1961人でございました。先ほどお話ししましたが、例年実施していました秋の企画展は諸般の事情により実施を見送ったところでございます。

②「失われゆく昭和の仕事―戦中・戦後の街頭風景―」につきましては、同じく、この後、図書情報担当より資料６で詳しく説明させていただきます。

５の資料収集につきましては、実物資料、図書資料等の収集状況を記載しております。実物資料は、表のとおり、寄贈１点、除籍１点のプラマイゼロで累計６万4162点となっております。

16ページ、図書資料におきましては、1869冊を収集しまして、累計で14万5597冊となっております。

６、戦中・戦後の労苦を伝える語り部活動についてですが、現在18名の語り部が活動しております。定期講話会の開催、講話派遣という活動しております。講話派遣につきましては、小学校あるいは遺族団体等から依頼派遣、それから、昭和館で団体見学後に希望される方々にも講話を実施しております。

なお、今年度は初の試みとしまして、17ページの上のほうに④がございしますが、厚生労働省が、当館以外に、語り部事業を委託している、しょうけい館と首都圏中国帰国者支援・交流センターと連携しまして、合同で講話会、交流会を実施いたしました。

同じく17ページの7、情報検索システムの充実につきましては、記載しているとおりでございますが、①デジタルアーカイブの公開につきましては、昨年の4月1日から公開を行いまして、1月31日末のアクセス数は71万566件となっております。

続いて、8の資料公開については、状況を17ページから19ページにかけて記載しております。特記事項としまして、19ページになりますが、(3)の⑤SPレコード鑑賞会につきましては、次世代の語り部の講話会終了後、SPレコード鑑賞会を実施したり、また、講話会の前後の準備段階からBGMを流したりしてSPレコードの普及に努めたところがございます。

20ページを御覧ください。9、関係施設との連携については記載のとおりでございます。

10、昭和館運営専門委員会の開催につきましては、昨年7月と本年2月の2回開催したところがございます。

21ページから32ページにかけましてアンケート結果を整理してございますが、時間の都合もありますので割愛させていただきます。全体を見ましておおむね良好な意見をいただいているところがございます。

続いて、学芸担当及び図書情報より説明をいたしたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

○林学芸課長 学芸課長の林と申します。よろしく申し上げます。

資料5になりますが、今年の3月に開催します企画展の内容を簡潔に御説明させていただきますと思います。

今回は開館25周年記念の企画展といたしまして「昭和を駆け抜けた超特急～燕(つばめ)、そして新幹線へ～」というタイトルの企画展を開催いたします。表紙のほうにありますが、資料の展示点数は127点ありますが、うち4割が借用になります。昭和館が所蔵している資料の傾向としまして、こういった技術的なものに関する資料というのが、昭和館の資料ではなかなか補えない部分がありましたので、今回は大宮の鉄道博物館さん、そして京都の梅小路にあります京都鉄道博物館さんの御協力のもとで借用のものが割合としては多いです。

次、開けていただきまして、1ページ目の右側に構成があります。内容は3章立てで構成しておりまして、Ⅰが「超特急『燕』の誕生」、Ⅱが「戦時体制と鉄道」、Ⅲが「復興—『夢の超特急』への道—」という3部構成で展示を構成しております。時間軸としましては昭和初期から昭和39年までが範囲となります。この特急「燕」という列車が昭和5年に走り始めて、そして新幹線へと移り変わっていくところまでの流れになりますので、ちょうど昭和館が扱っている時間軸とフィットするということで、そういった時間軸を範囲としております。

では、次を開けていただきまして、3ページ目、プロローグになります。特急という列車は、私たちも日常で身近に耳にする乗り物ではありますが、実はこれは「最急行」と呼ばれていた長距離列車が元になっているということで、元になった列車は明治39年に新橋



と神戸間を結んだと。分かりやすく言うと、運賃と別に特急料金を徴収するという列車がこの明治39年に登場したということで、これがベースになったということです。

次のI章の「超特急『燕』の誕生」というところです。この特急列車は、鉄道省が旅客の誘致を目的として開発をしたものになるのですが、列車の誘致ということで、親しんでもらうために、列車にそれぞれ愛称をつけていきます。この愛称列車というのは、「燕」の前に「富士」と「櫻」という特急列車があるのですけれども、3番目に名づけられたものになります。昭和4年にまず「富士」と「櫻」が誕生しまして、翌年に「燕」が誕生するのですが、「富士」と「櫻」とこの「燕」との違いは、「燕」に関してはスピードアップを主目的にした列車だということで、こちらはどちらかというと技術開発、そして新幹線、いわゆるスピード化を目的とした特急列車ということで今回扱っております。

続きまして、5ページのところになります。この特急「燕」の特色について、こちらでは表も含めて分かりやすく説明をさせていただいております。この特急「燕」の開発というのは昭和の初期に始まりまして、昭和4年の年末に試運転が行われて、それで大々的に昭和5年10月に開業する列車なのですけれども、これの開発は大都市間の移動のスピードアップが目的になります。実際は東京から神戸までを結ぶのですけれども、東京-大阪間を8時間20分、神戸までは9時間ということで、表定速度は68.2キロ。これは駅の停車時間も含めたものの速度になるのですが、1時間でそれだけ進む。これが蒸気機関車の牽引で進むということで、非常に速いということで、この開発を進めていくのですけれども、技術的な機械の開発というよりも、例えば、その速さをどんどん突き詰めるために車両を減らしたり、蒸気機関の列車を取り換えたりしていたのをやめたり、そういった工夫によって結構速度アップをしていたということだそうです。そういったものをここでは説明をしています。特急列車の運賃はどのくらいの金額だったのかということで、当時の物価なども示しながら分かるような表なども展示しております。

少し先に行きますが、続きまして、11ページの第II章「戦時体制と鉄道」ということになります。

特急「燕」は、もちろん速く移動するためのものなのですけれども、どちらかというと、旅行といいますか、豪華な、気分的にもちょっと優雅になるような内装で、そういったしつらえになっていたのですが、日中戦争が始まります昭和12年以降になってきますと、こういった豪華な特急列車の扱いがどんどん変化していきますということをこちらで説明しております。

旅客輸送、要は人間の輸送よりも優先される輸送というのが戦時中になると増えてまいりますので、結局、戦地への物資輸送や出征兵士の輸送、あとは、国策によって、靖国神社への参拝を希望される方とか、そういった方の輸送のほうが優先されていったということをこちらのII章のほうで御説明しております。

16ページを開けていただきたいのですが、特急列車は最終的には戦争の影響を受けて廃止されていくのです。どうしても、内装が豪華で、かつ、技術も高いといった乗り物より

も戦時輸送のほうが優先されていきますので、この特急列車の運行というのはどんどん廃止されていくのです。今回扱う「燕」は昭和18年10月に廃止されています。みんなに親しまれた愛称列車は、最終的に、「富士」が最後になるのですけれども、「富士」が昭和19年4月に廃止されます。

実はその裏側で、後の新幹線計画へとつながります幻の弾丸列車計画というのがあったことをここでは御説明しています。輸送量がどんどん増加していくので、そういった問題を解消したいということで鉄道省が弾丸列車計画というのを立てるのです。今走っている日本の新幹線は線路が広軌幹線になっていますけれども、もともとの在来線は狭軌幹線になっていますので、広軌幹線の線路を引かないとスピードアップがなかなか図りづらいということで、それをやろうということを実は戦中から考えていました。ちょうど日中戦争が始まった後からこういった動きをしておりました。ただ、結果的に戦局がどんどん悪化し、かつ、戦争が長期化したということもありまして、それで昭和18年には計画が一度中止になったということに触れているのですが、これが後々の東海道新幹線計画に活用されていますよということをごちやうで説明しております。

では、次の17ページのⅢ章の「復興—『夢の超特急』への道—」というところになります。もちろん、鉄道も戦争でたくさん被災するのですけれども、直接の被害もさることながら、鉄道の被災での悩みというのは、そもそも旅客だけではなくて輸送で列車をかなり酷使していたので、使える列車がだんだん供給できなくなっていた。あと、修理をするための補修の資材が逼迫していたということで、線路が潰れたということよりも車両の荒廃が実は甚大で、それが問題だったそうです。かつ、GHQに車両の接収などもされます。でも、政府はなるべく国民生活の安定のために列車の運行は優先的にやるようにということで動かしていきます。もちろん、資材の供給・確保というのもどんどん安定していきます。昭和24年頃になりますと特急列車が復活しますということをごちやうで説明しております。

初めて復活した特急列車、こちらにも愛称が付きまして「へいわ」という名前の特急列車になるのですが、これが1年後の昭和25年に「つばめ」と名前が改称されます。要は、戦前・戦中に親しまれていた乗り物の名前をまた復活して使ったということで、こちらでは平仮名の「つばめ」になります。この「つばめ」が復活し、昭和30年代になりますと鉄道電化が進むという流れをごちやうでは説明をしております。

今回、借用資料で一番大きい資料ということで、実は19ページの一番右上にあります「つばめ」の実物のテールマークを借用する予定でいます。重量的にはたしか30キロぐらいあります。結構大きいのですけれども、これが今回大きな借用資料として持ってくる予定のものになります。

話がそれましたが、次、20ページの「東海道本線の全線電化」というところになります。列車は蒸気機関が主だったのが、電気によって輸送するというので、そういった切り替えというのが大体昭和30年代の前半になってきまして、東海道本線が昭和31年に電化します。全線電化をするのですが、そのときは電気の機関車が牽引するという形になります。

最終的に、今、私たちが乗っているパンタグラフに電気が通る形の特急列車の形になっていくのが昭和35年6月になります。これが電車特急と呼ばれる形になっていきます。

22ページのほうを説明します。まずは、この電車特急というのは、左から2つ目にあります写真の「こだま」になります。この「こだま」が昭和33年に登場した電車特急になります。この「こだま」の特色は、1日で東京-大阪間を往復できるというダイヤで、これがビジネスマンの方々にとって非常に便利だということで「ビジネス特急」と呼ばれた特急になります。この「こだま」が登場した後に「つばめ」が昭和35年6月に同じような形で電車特急へと生まれ変わるといった流れになっております。

最後、27ページ「『夢の超特急』の誕生」というところです。先ほど弾丸計画の話をしました。その話とここがつながっていくということです。国民生活もある程度安定し、復興のシンボル、特にこの時期、昭和30年代の真ん中になってきますと、オリンピックの誘致、そして日本のインフラがどんどん整っていく時代になっていきますので、そういった流れで日本にも新幹線を引くという工事を開始します。これが昭和34年から開始されて、たった5年、昭和39年10月に開業するという世界で一番速い列車になるのです。それをたった5年という短いスパンで開発できたというのは、戦中からそういったことを想定していたというところから、そういった技術を引き継ぐ形で開発をしたので、非常に早かったということになります。昭和館は、どちらかというと生活史、人物史という形で庶民の方々が出てくる展示が結構多いのですけれども、今回は、「つばめ」という列車がストーリーテラーといえますか、軸になった形で企画展を構成させていただきました。

簡単ですが、以上になります。

○佐藤図書情報部長 続きまして、写真展について説明させていただきます。図書情報部長の佐藤と申します。よろしくお願ひいたします。

今回、3月12日から6月30日まで「失われゆく昭和の仕事－戦中・戦後の街頭風景－」ということで、街中で見かける仕事についての写真を紹介いたします。展示点数は全体で46点、そのうち12点がカラーの写真となります。概要のほうを幾つか写真をピックアップして紹介させていただきます。

1番目の下駄の歯入れ屋ですけれども、てんびん棒で工具とか資材を担いで客寄せの太鼓をたたきながら路地を練り歩いていた歯入れ職人の写真となります。

続きまして、7番目の毒消し売りですけれども、奥に写っているのは丸の内ビルディングになります。薬売りといえますと、越中富山の行商人というのが有名ですけれども、越後新潟の毒消しというのは、製薬も販売も女性が行う、着物姿で荷物をしょって売り歩くというのが特徴だったということで、こういった姿が各地で見られたということです。

資料をめくっていただきまして、2ページ目の12番、木炭を補給するバス運転士。こちらは、日中戦争の長期化によっていろいろな代用品等の使用をすることが強られるようになります。これまでガソリンを燃料としていたものから、木炭を不完全燃焼させて出したガスを燃料とする代燃車というものが登場いたします。その改造したバスに木炭を補給

しているバスの運転士の姿を捉えております。

下の段に行きまして、15番目が郵便配達をする女学生たちの姿を写したものとなります。こちらは、男性が出征されたことによって配達員が不足したため、夏休みを返上して日本橋郵便局で郵便や電報の集配に当たっている日本橋高等女学校の生徒の写真となります。

17番目は銀座四丁目の交差点の写真になります。空襲後、瓦礫等を片づけたり、消火の作業をしている消防士や警察官の姿となります。

資料をめくっていただきまして、20番目は闇市の屋台の写真になります。進駐軍から払い下げられた残飯を煮込んで売っていたいわゆる「残飯シチュー」と呼ばれたものの屋台の写真です。「栄養汁」という張り紙が貼ってあるのが御覧いただけるかと思えます。

23番目は宝くじ売りです。戦後復興のための資金とするために宝くじの販売が始まりまして、20年の段階では賞金10万円だったのですけれども、22年の段階では賞金100万円に引き上げられております。戦後のインフレによる物価上昇の様子が分かるようにということで、いろいろな物価の変化もパネルとして展示をする予定でおります。

27番のサンドイッチマンの写真は、コロムビアレコードの「湯の町エレジー」のポスターを前後にかけて宣伝をしているサンドイッチマンの様子です。写真が小さいので分かりづらいかとは思いますが、履物のほうにも工夫がしてありまして、水でスタンプを押すような形で広告ができるということで、「湯の町エレジー」の広告とは別に、この履物も広告代理店のほうが宣伝のためにこのサンドイッチマンに履かせているという状況です。

資料をまためくっていただきまして、戦後のここからカラーの写真も増えてまいります。

34番の豆腐の行商人の写真です。戦前からこういった形態で売り歩いておりますが、これは進駐軍の人が撮った写真で、珍しかったのか、ちゃんと木おけの中まで写している写真が別にありますので、別写真を一緒に展示して、木おけの中の豆腐ですとか、木箱の中にはどういったものが入っていたのかが分かるようにしたいと思います。

もう1枚めくっていただきまして、最後のページになりますが、40番の写真は、同じように、路上で日用品の修理をする職人たちの様子を捉えた写真です。奥のほうには鋳掛屋がおりまして、その手前に傘修理の人、その手前に靴修理の人とかもいるのですけれども、そちらも手元を大きく写した写真が別カットでございますので、そういった写真も併せて紹介したいと思います。

コロナの期間は、2階の写真展の会場から館内に入るために1階の入り口まで行かなくてはならなかったのですけれども、今回、コロナ前と同様に2階からも館内に入れるようにいたしますので、館内でもっといろいろな資料を見てもらうという誘導をしたいと考えております。2階の写真展の会場のほうでは、こういった仕事に関するSPレコードの音源、「毒消しゃいらんかね」という歌ですとか、あとは、宝くじ発売の頃に発売された「宝くじの歌」などもございますので、そういったものをBGMとして流す予定でおります。

また、45番で紹介している羅宇屋ですとか46番の踏切番など、写真だけではなくて、作業している様子が映像でも残っておりますので、関連のSPレコードの音源があるとか、こ

これは映像でも見る事ができるというのを会場のほうにも表示いたしまして、5階の映像音響室あるいは図書室とかということで、館内のほかの資料も見ていただくような誘導を心がけたいと思っております。

簡単ですが、以上です。

○波多野座長 説明は以上ですか。

○岩楯総務部長 はい。

○波多野座長 ただいま今年度の事業につきまして御説明がありました。もし何か御意見やら御質問がありましたら、お願いいたします。

入場料のことなのですが、去年上げましたよね。幾ら上げたのですか。

○岩楯総務部長 100円です。300円から400円に。

○波多野座長 何か影響は。全然なかったのですか。意見もなかったのですか。

○岩楯総務部長 なかったですね。おかげさまで。

○波多野座長 特に誰かに聞いたりしたのですか。そういうことはしないのですか。

○岩楯総務部長 館内の常設展示室でアンケートを取っておりまして、その中にはそういう否定的な意見はなかったです。

○波多野座長 もう一つ、デジタルアーカイブを始めましたね。内容はどんなものだったのですか。

○佐藤図書情報部長 内容につきましては、まず、学芸部のほうで展示等で紹介している実物資料と写真資料、映像資料、オーラルヒストリーになります。あと、絵画ですね。空襲の体験の絵画等も紹介しております。そのほかに、図書と地図、海図、SPレコードのほうは目録検索となっております。

○波多野座長 アクセス数が71万ちょっとですよ。そうすると、半年ぐらいですか。去年、いつ公開したのですか。

○佐藤図書情報部長 4月1日からです。

○波多野座長 それでその年いっぱいぐらいですか。

○佐藤図書情報部長 1月末まで、先月末までです。

○波多野座長 71万。余り多くはないですね。

今の御説明についてほかに何かございますでしょうか。

それでは、後からでも結構ですけれども、6年度の事業計画についてお願いいたします。

○岩楯総務部長 それでは、資料2のほうにあります6年度の事業計画についてでございます。6年度も要点を絞って御説明させていただきます。

資料2でございますが、まず最初の1ページでございます。歳出関係の金額でございますが、現時点の見込みで記載しておりまして、6年度はほぼ横ばいという状況でございます。一番下の※印を見ていただきますと、5年度の補正予算にて約8000万円が計上されたところでございます。これにつきましては繰り越して6年度に執行できるということでございますので、実質的には6年度は増額となるような見込みでございます。いずれにしま

しても、最新の金額につきましてはこれから厚生労働省の委託契約によって決定される予定となっております。

続きまして、2ページを御覧いただきたいと思います。2～3ページでは、2、広報活動計画、3、来館促進対策、4、展示事業について記載しておりますが、例年どおり記載していく予定でございます。

続きまして、3ページを御覧ください。（2）②の特別企画展につきましては、「昭和館開館25周年記念」と冠をつけさせていただきまして、「慰問展」というテーマでこの6年7月から開催を予定しているところでございます。

4ページに進んでいただきまして、（3）の巡回特別企画展におきましては、令和6年度は大分県と京都府で開催を予定しております。大分県につきましては、しょうけい館、平和祈念展示資料館との3館連携企画展となっております。

5ページ、（4）写真展につきましては、開館25周年ということから、先ほどの春に実施以降、通年で実施予定としておりまして、テーマは検討中としております。

5の資料収集等は記載のとおりとなっております。

6ページをお開きください。6の戦中・戦後の労苦を伝える語り部活動事業につきましても、引き続き講話活動等を実施していく予定でございます。

7、情報検索システムの充実につきましては、記載のとおりでございます。

7ページをお開きください。8の資料の公開・展示の（1）のデジタルアーカイブの充実でございます。現在、デジタルアーカイブの図書情報につきましては、先ほど話がありましたように、目録公開のみ閲覧できるようになっておるところでございますが、これらのものにつきましては、その本文といえますか、本の中身も閲覧できるよう、著作権をクリアしながら順次デジタル化を進めていくこととしております。また、SPレコードにつきましても、館内アーカイブでは音源も聞けますが、デジタルアーカイブでも音源が聞けるように進めていくことにしております。その他は記載のとおりとなっております。

続いて、8ページを御覧いただきたいと思います。9、関係施設との連携、10、運営専門委員会の開催は、記載のとおりとなっております。

最後になりますが、11、開館25周年記念事業でございます。館長からお話ございましたが、今年3月27日に何とか開館25周年を迎えることとなりました。記念事業を予定しているところでございますが、事業の一例として7項目挙げさせていただきました。時間の関係から一つ一つの説明は省略させていただきますが、25周年ということで25という数字にこだわらせていただいたところでございます。ちなみに、⑤のメモリアル懸垂幕掲揚につきましては、既に先行して1月18日に正面入り口に掲揚しておりまして、お気づきの方もあったかもしれませんが、お帰りになるときにでも御覧いただければと思います。

最後に、横長の資料7では、令和6年度昭和館運営事業ということでそれぞれの事業を個別具体的に一覧表にまとめております。後ほど御覧いただければと思います。

簡単ではありますが、私からは以上でございます。よろしくお願いいたします。

○波多野座長 ありがとうございます。

ただいまの運営事業計画案の説明につきまして、御質問とか御意見がありましたら、お願いいたします。

特別展示以外は特に新たに取り組むみたいなものはないわけですよね。あとは継続的なものですよね。そういうことですかね。

○林学芸課長 展示のほうですか。

○波多野座長 いえ。

○林学芸課長 すみません。それは、開館25周年で何か展示をするのですかというようなことですか。

○波多野座長 はい。

○林学芸課長 いわゆるメモリアル企画展ということで、開館20周年のときにも同じような対応で記念企画展ということで準備をさせていただきまして、例えば企画展を増やすとか、そういったことは実は予算計上もされていませんで実質不可能というのが答えになります。

○波多野座長 なるほど。分かりました。

大分県の巡回展は大分県からお申し出があったのですか。

○林学芸課長 令和6年度の巡回展は2回ではありますけれども、3館連携の催事を実際に開催できる会場が全国にはかなり少なく、それで広い面積ないし部屋数が多い施設を全国から探した上でピックアップしたのが大分県になります。ただ、これはうろ覚えなのであれなのですけれども、大分県は、過去、平成13年だったか、実は「今後の25年を見据えて」という資料に書いてあるのですけれども、2回目になるのです。なので、今回の大分県に関しては、誘致という形ではなくて会場の広さを優先したものになります。

すみません。これは平成19年に一度開催しております。

実は京都府のほうが実際に誘致を希望されて、京都府の場合は遺族会のほうから依頼がありましたので、それを受ける形で開催することになっております。

以上です。

○波多野座長 大分県の場合は、この3館連携なわけですね。だから、かなりスペースが必要だということになりますか。

○林学芸課長 はい。今年度開催した宮城でも、フロアの面積が約1000平米ぐらい必要だったので、そういった会場でないと一緒に3館分予約するというのはかなり難しいというのが現状です。もちろん、しょうけい館さんと平和祈念展示資料館さんにどこがいいですかというのを事前に確認してから昭和館のほうで会場を探すのですけれども、大分県の場合は昭和館以外は開催していないということだったのと、スペースも今回1000平米弱あるので、できるかなということで予約をさせていただきました。

○波多野座長 分かりました。

○岩楯総務部長 すみません。補足しますと、3館だと広いので。時期も6月ということ

で、ちょっと早めに。時期の制約も意外とございます。

○波多野座長 これは常に、地方の遺族会とか、そういう団体からの申し出によってやるわけですか。あるいは、こちらから呼びかけるのが多いのですか。

○林学芸課長 この事業の始まった平成13年当時は、もちろん、希望する県遺族会さんにお声がけされる形で行っていたのです。現状、地方展はほぼほぼ一周した形になるのですが、昭和館が巡回展に来るけれども、手伝える会員さんたちが少ないという現状はありますので、むしろ昭和館のほうで開催したことがない地域の県遺族会のほうにお声がけしたり。お声がけをする前に、どこの会場でできるかというのをリサーチするのですけれども、そういった会場がなかなか見つからないという自治体もありますので、今は昭和館が主体で開催地を決めて、それで県遺族会に開催ができるかという相談をした上で、開催するしないの可否を決めているという状況になります。

○波多野座長 何でも結構ですが、ほかにいかがでしょうか。

○鈴木委員 鈴木です。

昨年度の写真展が1回できなくなったというお話ですが、それはその内容をこの先また改定して使っていくのでしょうか。それともそれはそのままボツになってしまうという話なのでしょうか。

○佐藤図書情報部長 先ほど御説明しました仕事についての写真展というのは、当初、秋に予定していたものとなります。

○鈴木委員 了解いたしました。

○波多野座長 どうぞ。

○神津委員 資料2の7ページの「8 資料の公開・展示」の「(1) デジタルアーカイブの充実」というところで、図書・雑誌、実物資料とか、そういうのは収集するのだけれども、「国立国会図書館でもデジタル化が進んでいるため、昭和館ならではの収集資料を選択する」と書いてありますけれども、これは現実的には例えばどういうものを指すのでしょうか。

○佐藤図書情報部長 図書・雑誌のデジタル化の検討が始まったのは本当につい最近なのですけれども、まず最初にデジタル化していこうと考えているのは団体著作のものになりまして、厚生省ですとか第二復員省、あとは大日本防空協会等、そういったところが作成したもので、国立国会図書館のほうでは所蔵していない公開されていないものをまず優先的にデジタル化していこうと考えております。

○神津委員 ちょっとすみません。知りたいのですけれども、例えば、この収集をする人たちというのは何人ぐらいいるのかということと、データ入力というのは何人ぐらいが担当しているのかとか、SNSを担当している方は何人ぐらいいるのかというのをちょっと教えていただけますか。

○佐藤図書情報部長 資料収集については図書系のほうで担当しておりまして、図書系の担当職員は私と課長を含めまして7人になります。その中で収集候補というのを挙げまし



て、館内決裁を経た後に購入を進めております

書誌データの入力につきましては業者に発注しているものが多いです。例えば特別企画展ですとか写真展ですとか、そういったもので急ぎ使用するものについては、図書系のほうで館内で入力して装備まで行って閲覧に出すということは行っておりますが、9割以上は年間で外注することになっております。

○神津委員 それはSNSも同じですか。

○佐藤図書情報部長 SNSについては各部にそれぞれ担当がおります。

○神津委員 なるほど。分かりました。

○波多野座長 よろしいですか。

ほかによろしいでしょうか。

それでは、特にここを修正という御意見もなかったようですので、事業計画案については異議なしということで皆様よろしいですね。

(首肯する委員あり)

○波多野座長 ありがとうございます。

そのほかですけれども、事務局から何かございますでしょうか。

○山田補佐 初めに審議官からの御挨拶の中で触れさせていただきましたが、去来年度は戦後80年ということで、厚生労働省として記念事業を検討しているところです。運営有識者会議の皆様からの御意見などございましたらいただきたいと考えているところでして、何か御意見がありましたら、事務局宛てにメールなどでいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○波多野座長 では、皆さんよろしくお願いいたします。

そのほか何か御意見、御質問がありましたら、よろしくお願いいたします。

それでは、2件については審議も尽くされたと思いますので、事務局におかれましては、皆様からいただいた御意見を踏まえながら今後の運営に生かしていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

次に、次回開催予定なのですが、特段なければ来年の同じ時期、つまり3月頃を予定しております。改めて事務局から委員の皆様へ御案内の連絡をいたします。よろしくお願いいたします。

それでは、24回運営有識者会議はこれで終了いたします。